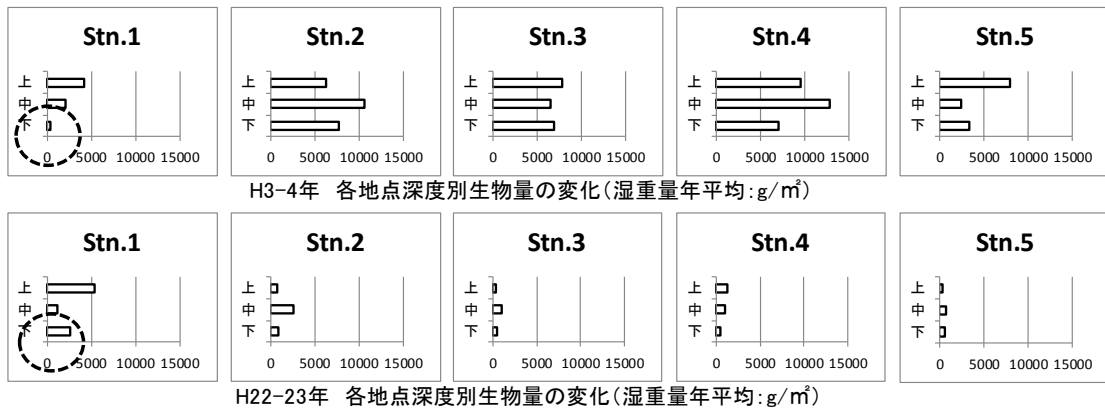
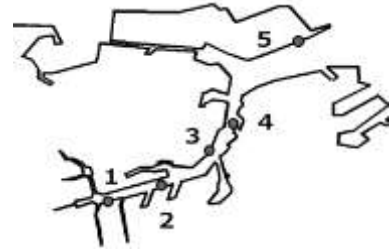


2) 湾奥 (Stn.1) の下層においては、20 年前は貧酸素状態となることが多く他の地点に比べ生物量が極めて少なかったが、今回調査では生物量の増加が見られた (下図)。



3) ムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイなど汚濁した内湾などに繁殖することが多い外来種が、今回の調査で激減していた。

ただし在来種であるマガキも激減した。この原因については今後も調査が必要である。

4) カイメン、コケムシなど、20年前には湾口部でしか観察されなかったものが、今回、湾の奥まで侵入していた。溶存酸素等、水質改善の結果と考えられる。

なお、カイメンについては水質改善の生物指標となる可能性が高く、今後も調査したい。

2. 冊子「洞海湾～岸壁にすむ生きものたち～」について

冊子は2部構成で、「洞海湾の岸壁で見られる生きもの」の紹介 (p4～) と、付着動物調査の結果である「洞海湾の付着動物と水質」の20年間の変化を解説 (p26～) している。

一般向けに写真や図を多く使い、洞海湾やそこにすむ生物について興味をもってもらうことに主眼を置いて作成した。したがって、調査時に観察された付着動物以外の生物 (海藻やヒトデ、ナマコなど) も含めて紹介している。

3. 冊子の配布先について

市内の中学高校、図書館など。